

次の文章は、谷村志穂の『アポリジナル・ランド』の「ドリーミングを完成させた長老デイヴィッド」の一部です。一九九三年、筆者はオーストラリアを訪れ、現地の案内人にもなわかれて、以前から興味を持っていた先住民のアポリジニが住む土地を歩くことになりました。この文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十七以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十七の答えは国語一六の解答らんに書きなさい。字数の指定がある問題は、句読点も一字と数えます。

ある日、デイヴィッドが私たちのキャンプをたずねてくれた。

早朝にチャリーが車で彼のことを迎えに行ったのだ。デイヴィッドは薄緑色の着古したポロシャツに、コットンのズボンを半分に切ったものをはいており、足元は裸足だった。

チャリーが湯を沸かし、

「コーヒーと紅茶はどちらがいい？」

とデイヴィッドにたずねると、彼は少し考え、小声で答える。

「昨日は紅茶をもらったから、今日はコーヒーにするよ」

デイヴィッドは、ホーローのカップを持つと、遠くを見ながらゆっくりコーヒーを飲んだ。ミルクとお砂糖のたっぷり入ったコーヒーを、味わいながら飲んだ。お酒と同様、コーヒーも紅茶も彼らの文化には元々存在しなかったものだが、デイヴィッドとコーヒーとはとても馴染んでいた。

チャリーが食料をつめたダンボールからビスケットを取りだし、デイヴィッドに勧める。彼が手に取る限り勧める。デイヴィッドがもういらぬと言っていると、チャリーはさりげなく、だったらのこりは持って帰ってくれというふうに手わたす。

白人であるチャリーは、1 そうして注1アポリジニの友人たちと独特の距離を取っているように私には見えた。今では彼らのマーケットにだってビスケットは売ってはいるけれど、やはりそれは貴重なのだ。そしていくらチャリーがアポリジニの注2フィールを全身に受け止めたところで、彼が白人であることにも変わりはないのである。

お茶の時間を終えると、デイヴィッドが、注3ブッシュの中を案内してくれることになった。

彼は静かに立ち上がると、注4ウォーター・フォールの水辺をそれて注5灌木林の中へどんどん入っていった。私たちキャンプ組は、並んでデイヴィッドの後に従った。

デイヴィッドは白髪で、痩せている。膝から下は骨と筋が見えている。

私が年齢をたずねると、彼は六十七歳といたり、八十歳と答えたりした。

だが彼は、とてつもない速さでブッシュの中を「A」歩いた。

デイヴィッドのポロシャツが薄緑色だからよけい、私は 2 ややもすると彼を見失いそうになった。

下草が足元をちくちく刺す。灌木は視界を折々さえぎり、全体には小高い斜面になっている。

彼は少し俯き加減で歩いているのに、彼が時々立ち止まるときは必ず何か野生の動物たちを見つけたときで、それも私を驚かせた。

「今、ロック・ワラビーが走っていったろう」  
指をさす。

だが残念なことその瞬間には私はまだ彼にまったく追いついておらず、ぜいぜいしながら歩いている。

「気がつかなかった」

私がそう言っても、デイヴィッドは小さくうなずくだけで。

「ああ、あれはデインゴ、野犬だ」

彼はそうも言ったが、私はまたもや見逃した。とにかく彼についていくのが精一ぱいで、また動物だって動きがすばやい。デイヴィッドが指差す方を見たときには、すでに影も見えない。動物の逃げた跡なのか、木々がかすかに揺れているだけだ。

3 「また気がつかなかった」

私は正直に言う。

そんなことを何度か続けているうちに、私は全身汗まみれになっており、ゆでダコのように赤い顔をしていたのではないだろうか。Tシャツから伸びた腕には植物の葉によって細かな傷ができ、サンダルをはいた足元もちくちくしている。また私はおろかなことにデバッグに貴重品や薬品類を一式入れたまま歩いており、それも災いした。それがずっしり重く肩に食いこんでいたのだ。軽装のイマハルに荷物はどうしたのかたずねると、彼はパスポートまでベースキャンプに置いてきたと答えた。こんな場所じゃあカラスしか持っていないかいいよ、と彼は言って笑った。

4 私は本当におろかだと思う。

デイヴィッドはそんな会話を聞いていたかのように私を振り返ると、もはや開き直つてのろろと歩く私にたずねた。

「お前は自分の国では歩いたことがないのか？」

私が 5 唇をかんでいると、彼はさらにイマハルに言う。

「どうなんだ？」

イマハルは笑いながら、

「リップな足があるのにね」と言った。

チャリーはデイヴィッドから遅れることなく歩き、さらに時々コースを外れては 6 自分のデিজュリドゥを作るための木を探していた。デイヴィッドも、もう動物を探すのはやめて、絵の具にするためのペインティング・ロックスを拾い始めた。イマハルも彼らの手伝いを始めた。

デিজュリドゥには、天然に生えている木の空洞がそのまま用いられる。

木の種類は、表皮がサーモンのようにピンクがかつたもの、黄色っぽいものなど様々だが、それらの木々の内部は自分でくりぬかなくともこの国の猛烈な蟻たちがきれいに空洞になるまで食べつくしてしまうらしい。

チャリーたちは灌木林の中を歩きながら、めばしい木が見つかるのと、表面を指でばちんばちんと弾いた。慣れてくるとその指の感触や音で、中がどれくらいくりぬかれているかわかるらしい。チャリーの腰には斧がさしてある。これと決めた木をその斧で切る。予想通り中がすっかり空洞になっていると、その場で斧を使い簡単に皮を剥ぎ、イマハルと一緒に両端を持った。



この木を乾燥させ、表面をみがきペイントし、楽器は完成品になるのだそうだ。

ペインティング・ロックスも至るところに転がっている。

乾燥した土地に、雨季には水路になると思われる道がいくつかある。そうした近辺には大小の岩石が転がっている。表面はいずれも灰色の何の**7**変哲もない石だが、それらの中には目の覚めるような鮮やかな色の眠っているものがある。黄色や、白や赤、黒などの原色を見事に発色する石だ。

デイジュリドゥだけではなく、アポリジニの絵画の彩色は、すべてこの天然の石でなされるのだ。

「この石もペインティング・ロックスだ。擦ってごらん」

岩場に出ると、チャーリーがしゃがみこんで私に教えてくれた。

外側は灰色の、汚れたチヨークのように見える石が、擦ってみるとやわらかく、ほかの石に擦りつけると鮮やかな赤を発色した。私は夢中になって石拾いを始めた。まぬけな話だが、私は昔から栗拾いや貝拾いといった、そうした拾い物になると**8**がぜん張り切る癖がある。このときも突然、元気を取りもどし、石をどんどん拾いチャーリーに手わたそうとすると、

「お土産に持っていきなさい」と言われた。

チャーリーは、そんな私を見て特別に石に興味を持つ人間だと思っただのか、さらに新しいことも教えてくれた。

岩場の中央には、古墳のように見える平らな石の積み上げられた場所があった。

「ここにある大きな石は、昔のアポリジニたちのキッチンだ。ここに火を焚いた跡があるだろう。この尖った石は矢じりだ。そしてこの丸く削られた石は、ウーマンズ・ストーンだ。そうだね、デイヴィッド？」

デイヴィッドはうなずく。

ウーマンズ・ストーンと呼ばれたその石は手のひら大で丸くすべらかだった。チャーリーはそれを私の手にのせ、さらに続けた。

「これで粉をひいたり、野菜をつぶしたりしたんだ。持って帰るかいい」

「構わないの？」

**9** 私が驚きだすと、チャーリーの方が不思議そうな顔をした。

「だってもうずっと昔のものなんでしょう？」

「何千年かは昔のものだと思う」

そう答えながらチャーリーは、だから何だと言うんだという顔をした。そんなものが落ちていたならすぐにロープが張りめぐらされ、研究対象にされてしまうのだということを、彼は考えつきもしないらしい。

「そんなものが、こうしてごろごろと落ちているのね」

「ここへはそんなに人は入ってこないんだ」

彼は当然のようにそう言った。

**10** 何というスケールの土地なのだろうと思った。

幾百年、幾千年も昔のものが、そのまま風に吹かれ転がっている。

その上を当たり前のように動物たちが通り過ぎ、こうして時には人の目にふれる。それをだれも大さわざしないのだ。

ウォーター・フォールにもどると、チャーリーは取ってきた木を干し、昼食にみんなの分のサンドイッチを作ってくれた。ライ麦パンにバターとからしをぬってハムをはさみ、皿にピクルスとザウワークラウトと、スライスしたトマトをたつぷりのせてくれた。

デイヴィッドも食べた。一つ一つ中身をのぞきながら、とてもうまいと言って食べた。

食べ終わると、デイヴィッドはクロコダイルのいるウォーター・フォールに釣糸を垂らした。私も横に並び、座った。

お腹がーぱいで、ほどよい日かげがあり、前の泉はワニはいるものの神秘的に深い木の香りを放っている。ブッシュを歩き回った心地よい疲労感が身体のすみずみに染みわたる。あとはビールがあれば最高ののだが、チャーリーはデイヴィッドがいる間はそれを出さなかった。私たちは代わりにあまいブッシュ・ティを飲み続けた。

私たちは日が暮れるまでじっと座っていたが、彼はもう、私に何も話しかけてはこなかった。ぼんやりした目で、釣糸を垂らしたままじっとしていた。

私も横に座って、仕方がないので釣糸を垂らすまねを試みたが、何しろそのウォーター・フォールには魚のいる形跡などほとんどないのだった。太陽はまぶしく、背中はこげるように熱く、ゆるやかな風が**時折**頬をなでるだけの中で、何も待たずにじっとしていた。

私がもう一度デイヴィッドに本当は何歳なのかとたずねてみると、彼は少し首をひねり、また適当に、七十歳だ、というようなことを言った。

**11** だがその間私たちは、まったく不愉快ではなかったと思う。あえて私たちは、と言いたいのだが、たがいに何も話さずに時間を過ごしていながら、その間に私にはデイヴィッドのことが少しずつわかっていくようではなかったのだ。**12** 変な表現だが、デイヴィッドという人が溶けていく感じだった。彼は何をしてもなく時折居眠りしていたし、私も同じだったが、夕暮れが迫り彼が帰る頃になると、私たちは並んで座り始めた頃よりずっと親しんでいた。その感覚はどうにも説明しようがない。ただ、私たちは何も話さずに、だが会話していたようだったと言うしかない。そんな経験を、私はほかにしたことがない。デイヴィッドはこれまでに私が出会ったどんな人ともちがう、不思議な人だった。

夜になるとチャーリーは、また火を囲み、こんなことを話してくれた。

「デイヴィッドは、集落の重要な仕事を担当する長老だ」と。

チャーリーは、ウイスキーを入れたホルローのカップを手にさらに続けた。

「デイヴィッドはすでにドリーミングを完成させた。ほかの集落のセレモニーにも呼ばれるようになったらしい」

ドリーミングの解釈は様々だが、チャーリーはそれを、

「うまくはいえないが『**ジサイ**』白昼夢のようなものだ」と説明した。

かつてこの大陸を**ジサイ**に歩き回っていたアポリジニたちは、地図や、コンパスや、手帳を持ったことは一度もなかったのである。

彼らは、そうした物がまったくなくとも、たとえば決まった日時にある一本のユーカリの木の下で、異なる部族の男同士が落ち合うこ



とができたのだそうだ。そんな彼らは地図を持たない代わりにソングラインという歌の道を持っていた。

チャーリーが言うには、白昼夢はまた夢告げのようなものであり、彼らにとつては重要な「注7」インフォメーションなのである。アポリジニたちは子供の頃からこのストーリーを書き続けてゆく。完成する者もしない者もあるが、デイヴィッドはすでにそれを完成させたのだ、というのだった。

泉からはまたクロコダイルの立てる音がし、鳥の鳴き声が辺りに響き、火が目の前でぶすぶすとモえ続けていた。

「デイヴィッドは本当に年齢を知らないのね？」

私がつねると、チャーリーは言った。

星のよみがやく晩で、風がおだやかに空気をゆっくりと旋回させていた。

「13 彼らが大切にしているのは、そうした現実世界ではなく、

「注8」スピリットのワールドなんだ。ドリーミングを信じ、描く。そうすれば、たとえばデイヴィッドが死んでも」

チャーリーはそう言うのと、焚き火で照らされた足元の砂を拾い上げ、大きな手の中からさらさらとこぼした。

「彼のスピリットは生きて、この Land は彼のことを憶えているんだ」

そう言った。

「Land？」

私がつねかえすと、チャーリーはうなずいた。Land、この土地は彼のことを憶えている。

私は感動し、全身がコキザみに震えるのを感じた。それは、闇の中で話すチャーリーの淡々とした話し方にひきつけられていたということも、もちろんある。

だが何より、その話には、私がそこでキャンプをし始めたときから、もしくは居住区に足をふみ入れたときから感じていた何かが含まれていた。闇の恐怖を薄れさせる独特のやわらかさ、木々のざわめき、だれも見せるおだやかなリズム……。そう言われてアラタめて辺りの闇に14目をこらす。森があり、岩肌いわはだに囲まれた泉があり、その周囲の砂の一边に私たちは今座っている。

火の粉が時折、生き物のように砂の中へ飛んでは消えた。

「この土地は彼のことを憶えている……」

イマハルが無意識にそうくり返すのを私は聞いた。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 そうしてアポリジニの友人たちと独特の距離を取っている について、次の問いに答えなさい。

(1) ぼう線部1は、チャーリーがどのような行動をとったことを指していますか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちとはちがった格好をしているデイヴィッドを、人に見られないように車でむかえに行くこと。
- イ コーヒー好きのデイヴィッドのために、ミルクと砂糖の入ったコーヒーを用意すること。
- ウ デイヴィッドがいらないと言った分のビスケットも、それとなく持って帰れるようにすること。
- エ 白人であるチャーリーが消極的なデイヴィッドを、自分のひらくお茶会に参加させること。

チャーリーは砂のついた手を払うと、マットにひじをつき、続けた。

「それでも彼らはパンツをはくようになったからね。かつてアポリジニたちはパンツをはかずに火の夢、水の夢を見た。それらに導かれ旅を続けた。でも今ではパンツをはいて、国に勝手に支配されて移動することもできない。15 少しずつスピリットは失われているんだ」

チャーリーはそうして、さらにいくつかのアポリジニたちの話を教えてくれた。

そんなチャーリーがしばらくすると、ふと私とデイヴィッドの様子を思い出したかのように言った。

「日本人とアポリジニはよく似ているよ。君たちはたがいに何もたずねない」

そんなことはない。私はだれにもよく物ごとをたずねるおしゃべり女なのだと思ったが黙った。16 私はある時間、デイヴィッドが夢を見ていたことを確かに感じていたのだと答えたかったが、それも言えなかった。たった一度きり一緒に過ごしたよそ者がそんなことを言うのは、あまりに「注9」不遜だとふとちゅうちょしてしまっただがあの時間、デイヴィッドは私の横でぼんやりと釣糸を垂らしながら、確かにこの土地の精霊たちと交信していたのである。私は彼の横でその感覚に支配されていた。

17 私私の無意識が、日本語でも英語でもないまったく別の言語の感覚を急速に要求していることを知った。あるいはもしかしたら、それは言語を超えた直感を信じるということだったのかもしれない。

(谷村志穂『アポリジナル・ランド』)

【注】

- 1 アポリジニ 〓 オーストラリアの先住民
- 2 フィール 〓 ふん囲気
- 3 ブッシュ 〓 しげみ
- 4 ウォーター・フォール 〓 滝
- 5 灌木林 〓 低木の林
- 6 白昼夢 〓 真昼に見る夢、また非現実的な空想
- 7 インフォメーション 〓 情報
- 8 スピリット 〓 たましい
- 9 不遜 〓 思い上がった態度



- (2) ぼう線部1とは、どのようにすることですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 自分の考えを感情的に表すこと。  
 イ 相手の文化を学びながら身につけること。  
 ウ 自分の思いを積極的に伝えること。  
 エ 相手の立場を考えながら接すること。

問三 本文中の「A」にもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息を殺して    イ 肩をおとして    ウ 風のように    エ 蝶のように

問四 ぼう線部2と8の言葉の使い方としてもっともふさわしいものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) 2 ややもすると

- ア 夏休みはややもするとなまけがちである。  
 イ 遠足はややもすると中止になった。  
 ウ 入学式はややもすると楽しい。  
 エ クリスマスはややもするとお正月になる。

(2) 8 がぜん

- ア 注意されてもがぜん意見を変えない。  
 イ ほめられたらがぜんやる気が出てきた。  
 ウ 二つを比べてがぜんこちらのケーキが好きだ。  
 エ 時間のある限りがぜん問題を解きつづける。

問五 3 「また気がつかなかった」とありますが、

- (1) 何に「気がつかなかった」のですか。ここまでで「気がつかなかった」ものをすべて書きなさい。
- (2) なぜ「気がつかなかった」のですか。理由となる一文を本文中からぬき出してはじめての五字を書きなさい。

問六 4 私は本当におろかだと思う とありますが、「私」のどのようなところが「おろかだと思う」のですか。解答らんに合うように書きなさい。

問七 5 唇をかんでいる とありますが、この時の「私」の気持ちにあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の努力不足を後かいする気持ち。    イ ばかにされてくやしく思う気持ち。  
 ウ 自分のことをわかってもらえずおこる気持ち。    エ 日本への思いちがいにあきれる気持ち。

問八 6 自分のデিজユリドゥを作るための木を探していた とありますが、

(1) 「デিজユリドゥ」とは何ですか。漢字二字で本文中からぬき出して書きなさい。

(2) ここでの「デিজユリドゥ」の特徴の説明としてあてはまるものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 天然に生えている木で作られている。    イ サーモンのようにピンクがかっている。  
 ウ 内部は人の手でくりぬかれている。    エ 発色する石によって色がつけられている。  
 オ 手のひら大で丸い形をしている。

問九 ぼう線部7と14の言葉の意味としてあてはまるものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) 7 変哲もない

- ア まとまった考えがない。    イ たいしてかたかない。  
 ウ とくに変わったことがない。    エ はつきりとはちがわない。



問十七 17 私は私の無意識が、日本語でも英語でもないまったく別の言語の感覚を急速に要求していることを知ったとありますが、この文章は「私」が「デイヴィッド」という他者とすごしたことをきっかけに、今まで意識したことのない感覚に気づいた場面です。あなたとは同じような経験をすることがありますか。ない場合は想像したことでも良いです。その経験と、どのように感じたのかを書きなさい。また、その時に考えたことを説明しなさい。

